

歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第15号

平成13(2001)年3月1日発行

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史的資産調査会

事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内

〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1

TEL.045-225-2171

FAX.045-225-2172



山手111番館 写真撮影：米山淳一

歴史主義様式、最後の華

藤森照信 東京大学教授

横浜の西洋館の特徴について述べてみよう。その一つに、本格的なものが多いという点がある。

横浜と同じ時期に同じように開港した港町としては長崎と神戸が知られ、それぞれに多くの西洋館が伝わってきているのだけれど、その建築様式に着目すると、横浜は長崎、神戸とさうとう違っているのだ。

たとえば長崎にはグラバー邸が建ち、神戸には15番館が残る。訪れたことのある人なら思い出していただきたいが、二つとも建物にヴェランダが張り出している。建物の表情のなかで一番目立つのは広々としたヴェランダ。こうした様式を、ヴェランダ・コロニアル様式、という。コロニアルの名のとおり、インドや東南アジアでヨーロッパの植民者たちが成立させた様式で、作りは木造で簡便、デザインも大ざっぱ、表現をヴェランダのただ一点に絞ったところが生命。もちろん手がけたのは建築家というよりは建設技術者の面々。

こうしたヴェランダ・コロニアルが横浜にはない。正確にいうと、今はない。横浜にも幕末から明治のなかばにかけて軒並み作られていたのだけれど、それ以後の大発展のなかで建て替えられ、残ったものも関東大震災で壊れ、消えてしまった。

現在、横浜を歩いて目にする西洋館は、ヴェランダ・コロニアル全盛期より後の時代に作られた。もっと言うなら昭和になってからの西洋館が多数派を占めるのである。作りは鉄筋コンクリートが多いし、木造の場合でも様式は本格的で、細部の微妙なデザインも建築家らしくしっかりしている。一言でいうなら本格的。専門的にいうと“歴史主義様式”。ギリシャ、ローマ、ゴシックといったヨーロッパの歴史的建築を範としたからこう呼ばれる。歴史主義様式は、戦後はモダニズム様式に押されて作られていないから、横浜の昭和初期の西洋館は、歴史主義様式の最後の華ということになる。

実例でいうなら、たとえば山手111番館がある。様式はスパニッシュ様式。スパニッシュといってもスペインから直接渡ってきたわけではなく、1920年代からアメリカの西海岸で大流行したスパニッシュ様式が、太平洋の対岸まで運ばれて来たのだった。あるいは、ホテル・ニューグランドもそうで、あれもアメリカ渡来のボザール系の様式だ。

本格的様式だから、世界規模での来歴も判明していて、あれこれ比較する研究も近年進んでいる。



ホテル・ニューグランド

## ベリック・ホールの建築について

神戸芸術工科大学名誉教授  
坂本勝比古

横浜の山手、緑豊かな元町公園に隣接して建つこの館は、現存する山手の西洋館のなかでも水準の高い内容をもっている。

建築されたのは昭和5(1930)年で、建築主は横浜で手広く貿易を営んでいたB. R. ベリック(Bertram Robert Berrick)であった。また、設計者は、アメリカ人建築家J. H. モーガン(Jay. H. Morgan 1873~1937)である。モーガンは大正9(1920)年に東京丸ビル建築のため来日した建築家で、その後横浜を中心に日本各地で幅広く活動した人物であった。港の見える丘公園につながる山手111番館や山手聖公会も彼の作品である。

この建物は東西に細長い形態をとっていて、この方法は南側に主要な部屋を配置することが可能な合理的な手法である。敷地東南に開いた正門からしばらく歩くアプローチを経て、建物の中央に位置する玄関ポーチに至ることができる。

建物の意匠上の見所は、全体としてゆるやかな屋根、明るい色調をもつ外壁に、タイルで縁取られた三連アーチのポーチ、化粧垂木の軒廻りに帯状のタイル飾り、クワットレフォイル(四弁狭間飾り)などの装飾で、洗練された意匠でまとめられている。

内部は重厚な鉄製グリルの付いた扉を開けると、玄関ホール右手に広い応接用のホールがあり、その中央に暖炉が設けられ、高い天井には木製の梁型をみせる中世の城館の室内を思わせる空間が表現されている。玄関の左側にはごちんまりした部屋と、その西側に食堂があり、やはり暖炉が設けられている。

玄関ホールからは2階に上る直通階段があり、鉄製グリルの美しい手摺が付いている。

2階は、北側に廊下を通す片廊下形式の間取りである。

ベリックについての消息は不明な点が多いが、イギリス人で、明治31(1898)年頃来日し、横浜とロンドンに住んで貿易商として活躍し、一時期フィンランドの名誉領事を引き受けたことがあった。また、日本人湯山氏と共同で事業を進めたといわれている。

この住宅は、第2次世界大戦後、近隣のセント・ジョゼフ・インターナショナル・カレッジに寄贈され、同校の施設として利用されてきた。

元町公園をめぐる一帯は、山手のなかでもエリスマン邸をはじめ、山手89-6番館(えの木てい)、山手234番館、雙葉学園鐘塔など歴史的建造物が多く残っているので、景観上も重要な地域であり、この西洋館の保存活用は極めて意義深いといえる。

※「Berrick」は「ベリック」と表記されてきたが、最新の調査により「ベリック」が適切であると判明した。

## 建築家ジェイ・H・モーガンの建築作品について

関東学院大学教授  
関和明

モーガンの作品の特徴は、西欧のさまざまな建築様式を、建築の種類に応じて巧みに使い分け、建物の全体が、落ち着いた意匠で整えられている点にある。

「山手聖公会」や「関東学院中学校」では、英国中世の様式が採用され、城砦風の輪郭や壁面の浮彫り装飾の形式に、共通点が見られる。現存していないが、山下町に建てられた「シティ・バンク横浜支店」と「アメリカ領事館」では、古典主義建築のオーダーや装飾手法に則った格調の高いデザインを志向した。モーガンの作品の中で最大の規模をもつ「旧根岸競馬場観覧席」も、デザインとしては、こうした系列に入るかもしれない。

山手に残る二つの住宅「ベリック・ホール(旧ベリック邸)」と「山手111番館(旧ラフィン邸)」は、全体を南欧風のスパニッシュ・スタイルでまとめられている。前庭や庭園に面して三つのアーチが連続して並び軽快なポル

ティコ(玄関廊)のモチーフは、一見して共通していることが分かる。また、敷地と建物と庭園の関係、アプローチの工夫などにも、快適な居住環境を演出しようという意図がみられる。

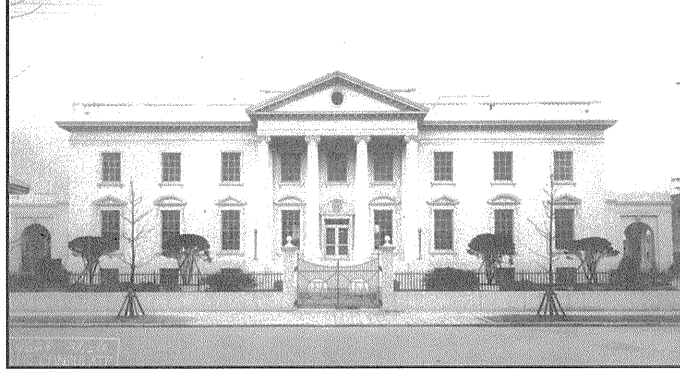
1920年代から30年代にかけて、モーガンが、日本でなした仕事は、時代の先端を走るような、斬新華麗なものではなかったかもしれない。しかし、基本的に既存の歴史的な建築様式の規範に従う、成熟し安定した作品が、横浜の地をはじめとして、たくさん造られたということは、彼のような作風が受け入れられ、造り続けられる土壌が十分に存在していたことを示す。

彼は、当時としては大変モダンでかつ知的な日本人女性を妻とし、英語に堪能な彼女は、彼の秘書として協働して仕事を続けたという。また、外国籍の建築家として、最初に日本建築士会のメンバーになったが、多くの外国人建築家が、経済的な安定を図るために建設資材の輸入業者などを兼業する風潮があったにもかかわらず、彼は専らアーキテクトとして、設計および監理に専念するという職能的なモラルを貫いた。

近年、藤沢市にモーガンの自邸が現存していることが判明したが、この住宅には、一部に和風の要素が採用されており、まったくプライベートな空間であったせいか、彼の作品としては、やや謎めいた「不思議なデザイン」が、そここに散見される。



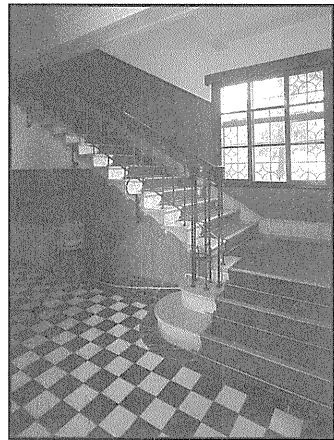
J. H. モーガン



アメリカ領事館



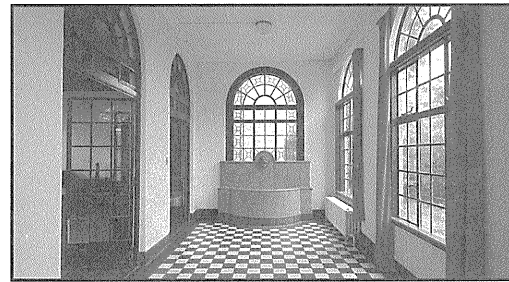
ベリックホール外観



階段



応接用ホール



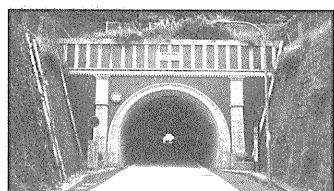
湧水のある休息室

## 歴史的建造物に7件認定 トンネルは初めての認定

横浜市は、「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づき、土木産業遺構や近代建築など7件を新たに認定した。これにより認定歴史的建造物は合計47件となった。

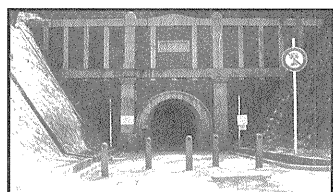
### ●東隧洞

震災復興期、昭和5(1930)年に水道管敷設を目的に建設された。入口外観は花崗岩や煉瓦張りの独特なデザイン。現在は道路路用トンネルとしても利用されている。トンネルは初めての認定となる。



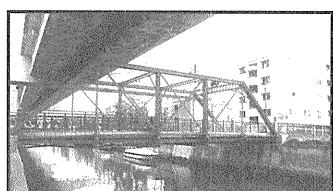
### ●大原隧洞

東隧洞と同様、水道事業により建設されたトンネル。東隧洞のほぼ半分のスケールであるが、外壁デザインは類似している。昭和3(1928)年の建設となる。東隧洞とともに初のトンネル認定である。



### ●浦舟水道橋

明治26(1893)年に架設された「旧西の橋」を昭和2(1927)年に移設(旧翁橋)。平成元年に再移設して、現在の橋梁となる。人道橋として使用され、現存する鉄橋としては横浜市内で最古の橋梁である。



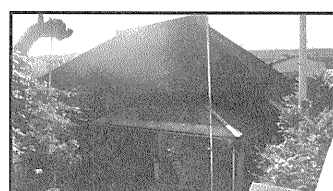
### ●せせらぎ公園古民家(旧内野家住宅主屋)

建築形式等から、江戸時代中期～後期の建物である。港北ニュータウン開発に伴い移築復元を行った。前面の池や周囲の緑、表門とともに保全され、市民によるイベント活用を積極的に行っている。



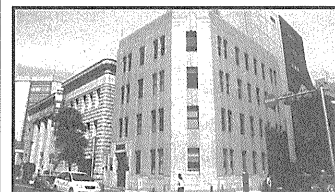
### ●旧新井家住宅主屋(八巻家)

建築形式等から、江戸時代初期～中期の建物である。現在も個人の住宅として大切に住まわれており、根岸の原風景を物語る重要な建物である。平成12年12月から保全改修工事を行っている。



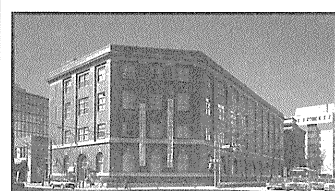
### ●馬車道大津ビル(旧東京海上火災保険ビル)

昭和11(1936)年に中規模オフィスビルとして建設された。シンプルなお外観ではあるが、タイルの多様な張り方によりオール・デコ独特のデザインを持つ。民間のオフィスビルとして現在も使用されている。



### ●旧横浜市外電話局

横浜の電信・電話施設の歴史を物語る戦前建築の貴重な現存例。昭和4(1929)年に逓信省官庁組織の設計により建設された。隣接する横浜情報文化センターとともにすぐれた歴史的景観を形成している。



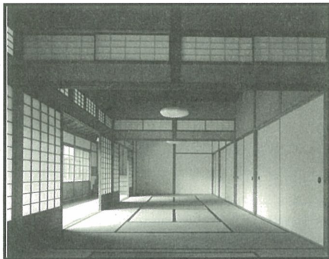
## 三溪園鶴翔閣オープン

「鶴翔閣」の名は、鶴が飛翔する姿を思わせる外観から名付けられた。ここは、横山大観・下村観山・前田青邨といった画家たちが滞在して創作活動をおこない、近代日本文化の創出に大きな役割を果たした場所でもある。

平成10年度に市指定有形文化財に指定（指定名称：旧原家住宅）。明治期の写真資料を含んだ文献調査や建物周囲の発掘調査、建物の部材調査等をもとに創建当初の姿に復元された。平成12年11月にオープンし、「迎賓館」としての対応から市民の文化的催事まで幅広く使用できる、まさに「利用できる文化財」となっている。



東側外観



茶の間様

## 横浜開港資料館旧館 (旧横浜英国総領事館) 市指定有形文化財となる

【指定名称】  
横浜開港資料館（旧横浜英国総領事館）及び旧門番所  
附設計図36枚、改修図面51枚  
（平成12年11月6日指定）

旧横浜英国総領事館は外交交渉上の重要な表舞台となってきた由来をもち、当建築もイギリス本国の政府機関の設計になる由緒正しい建物で、関東大震災後の昭和6（1931）年に再建された。

建築様式はイギリスの18世紀初頭より19世紀初めにかけて流行した時代の特徴を表現しており、その正統的な意匠の価値は高い。当時の総領事館としての利用状況が良く把握でき、かつ全体として創建当初の形式をよくとどめていて貴重。現在横浜開港資料館として活用されている。



## 近代化遺産2件が 国登録有形文化財に

【名称】  
横浜国立大学付属中学校校舎、  
横浜国立大学所有

昭和11（1936）年に建てられた横浜高等工業の本館。戦前の高等教育施設の希少な遺構。

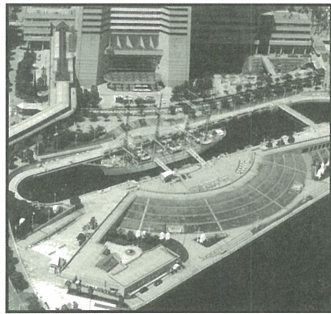
【名称】  
シェラル水屋敷地下貯水槽、  
横浜市所有

横浜に居留したフランス人、アルフレッド・ジェラルは、山手で貯水施設を作り船舶に供給する給水業を営んでいた。本施設はそのための地下貯水槽。元町公園の再整備に伴い、この地下貯水槽はポケットパーク的に整備されている。

## 1号ドックが 2号ドックに引き続き 国指定重文となる

【指定名称】  
旧横浜船渠株式会社第一号船渠（ドック）、  
横浜市所有

英国人技師パーマーの提言に基づき、明治22（1889）年設立の「横浜船渠会社」が建設した施設。海軍技師の恒川柳作が設計を担当し、明治31年12月に竣工した（開渠は明治32年5月）。大正期に内陸方向に延長され総長約204メートルとなった。1号ドックは、建設当時最大規模を有した明治期の代表的乾船渠（ドライドック）の一つで、大正期に築造された躯体延長部分も土木技術の時代的特色をよく示しており、乾船渠築造技術の変遷を知るうえでの価値も評価された。



写真提供：横浜マリンタイムミュージアム

## 新春ファミリー・ウォークラリー 木村家住宅、称名寺を見学

1月27日（土）第21回歴史を生かしたまちづくりセミナーが開催された。

今回のセミナーは横浜金澤シティガイド協会との共催で、称名寺や木村家住宅を中心に龍華寺、瀬戸神社など金沢区内の歴史的建造物を同協会メンバーのガイドによって見学するという新たなスタイルでの開催を試みた。

当日は、残念ながら積雪10cmを超える大雪ではあったが、熱心な参加者を迎えることができた。雪のため急遽見学場所を変更し、称名寺と県立金沢文庫、木村家住宅を見学した。

なかでも木村家住宅では、御当主の木村氏による徳川家康との縁をはじめとする木村家住宅の歴史や歴史的建造物で生活する苦労話など歴史的建造物所有者の生の声に触れることができた。参加者は木村氏の「歴史的建造物は公共のもの。私はいわばその管理人」といった印象深い話に熱心に耳を傾けていた。



称名寺境内



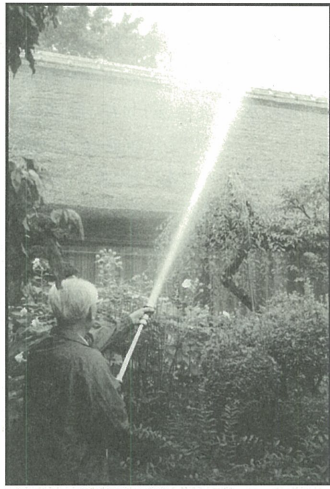
木村家住宅

## 古民家に強い味方！

旭区の新川家住宅主屋は、市内でも珍しい「両妻かど造」の茅葺屋根を持った建築物で、平成8年度に歴史的建造物として認定された。昨春までに茅の葺き替え工事が完了しており、引続き12年度は手動式放水銃の設置工事が行われこの度完了した。今後この放水銃が火災による延焼という心配から、この建築物を守ってくれる強い味方となるであろう。



設置された放水銃



屋根に向かって放水（補助ノズル）



## 全近（全国近代化遺産活用連絡協議会） 第3回総会、横浜で開催

近代化を支えた産業・交通・土木等の近代化遺産の保存活用を推進するため、平成9年度発足した全国近代化遺産活用連絡協議会は、文化庁建造物課の指導の下、財団法人日本ナショナルトラスト内に事務局を設けて運営している組織である。

幕末の開港により日本の近代化の先駆けとなり、近代化遺産が積極的に活用されている横浜市で、第3回総会が、都府県、市町村、民間団体等から99名の参加を得て、平成12年11月21日開催された。

また、同時に市民公開事業の近代化遺産のシンポジウムや全国近代化遺産写真展が開催された。翌日は会員による関内・山手地区の視察を行い、成功裏に終了した。

## BEATTY邸改修 より強く、より安全に。

BEATTY邸は、昭和7（1932）年頃建築された木造2階建の山手の西洋館。平成6年に外観の改修工事を行っている。所有者の「住み続けたい」という建物に対する愛着から、現在、安全性を高めるための構造補強工事が行われている。

## 馬車道大津ビルをめぐる

（社）日本建築家協会 JIA 神奈川代表  
金子修司

JIA 神奈川の事務局を馬車道大津ビルに移してから5年になろうとしている。「周辺歴史の交差点」と私が勝手に名付けたこの周辺には神奈川県立歴史博物館、旧東京三菱銀行、富士銀行を初め横浜の都市の変遷を見守ってきた多くの古い建物が歴史を語るかのように残っている。

昭和11（1936）年に竣工した馬車道大津ビルは小粒ながら当時の様子を残して改修され、建物を大切に慈しむオーナーの大津さんに共鳴する司法書士、建築家、音楽家等多業種が事務所やアトリエとしてこの環境を享受している。

玄関の付まい、スクラッチタイルの壁紙、白い壁、高い天井など古い建物の空間の豊かさが素晴らしい。多少の使いにくさは気にならない。

毎年屋上で開かれるオーナー主催のバーベキューパーティーにはテナントが集い、和気藹々と夜遅くまで語り合っている。ライトアップされた博物館のドームと吹き抜ける港の夜風が情緒を盛りあげられる。地下には多目的に使える大津ギャラリーが有り、ここで開催するJIAの研修会等は最後にワインとチーズのパーティーで賑やかに締めくくられる。

66年間に渡り使い続けられた大津ビルは、高度成長期のスクラップアンドビルドの嵐を乗り越え、賃貸ビルとして甦り生き続けている好例である。この馬車道大津ビルではオーナーと入居者が建物を大切にすることを共有し、新たなコミュニティが生まれているのである。



正面入口

## ジャック・クイーンの花粧直し

ジャックの名で知られる開港記念会館は、一昨年に天井の一部が剥がれ落ちたため休館して補修工事をすすめていたが、このほど工事が完了し、1月から利用が再開された。注目されるのはホール内部の装飾の復元で、舞台の縁飾部分など華やかな装飾が甦っている。

また、横浜港の顔ともいえるクイーンの塔をもつ横浜税関の改修が決まり、今年から工事に着手する予定。市民に長く親しまれた歴史的建造物を保全しながら、IT化などに対応するため、神奈川県警本部側を解体して増築する。増築部分は歴史的な景観に配慮して極力高さを抑えた計画とされている。



開港記念会館 講堂

## 横浜情報文化センター、 グランドオープン

長い閉鎖されていた旧横浜商工奨励館がリニューアルされ、日本新聞博物館と放送ライブラリーを核とした新たな情報文化の拠点「横浜情報文化センター」として平成12年10月にグランド・オープンした。昭和天皇が立ち寄られたという旧貴賓室や中央階段室が修復・保全され、往時を偲ばせている。

# 美しき学舎

## 横浜の歴史的な学校建築

### 吉田綱市 横浜国立大学教授

学校の建物には、どこか古いところが残っているのがいい。そこを築立った人たちが、幼かりし自分をのぶに都合だからではない。現にそこで学んでいる生徒たちにも、ずっと昔からある、何かしらゆかしいものの存在が影響を及ぼさないわけがないからである。時間の積層の前に人は謙虚になるし、長い人の営みが生徒たちにも、ずっと昔からある、何かしらゆかしいものの存在が影響を及ぼさないわけがないからである。時間の積層の前に人は謙虚になるし、長い人の営みが生徒たちにも、ずっと昔からある、何かしらゆかしいものの存在が影響を及ぼさないわけがないからである。時間の積層の前に人は謙虚になるし、長い人の営みが生徒たちにも、ずっと昔からある、何かしらゆかしいものの存在が影響を及ぼさないわけがないからである。

とはいいつつ、現実にはなかなか古い校舎は残らない。教育設備も教育方法も時代につれて変わっていくからである。古いものを残しつつ新しい設備や手法を導入することもできるのだが、それには手間

がかかるし、知恵もいるし、それにその学校に関係する(あるいは関係した)たくさんの人のコンセンサスがあるだろう。だから古い校舎を残していくのは大きな事業であり、現に残されてきているものは、みなそうした人たちの英断の結果なのである。

その英断の所産を横浜であげると、まず山手の三つの伝統ある女子校がある。横浜共立学園の本校舎(昭和6年)は、いちはやく市の指定文化財となっている。木造2階建ての大きな住宅のような建物で、暖かそうで親しみやすさを漂わせながらも、格調高くおごそかな雰囲気を保っている。フェリス女学院中高等部1号館(昭和4年)はゴシック調の建物で、いかにも学校建築という感じ。というのは、昔から大学や学校の建築にはゴシックスタイルが多かったからである。大学が神学を学ぶ修道院の施設から始まったからであろうし、世俗を離れた心身の鍛錬の園という意味もあるからであろう。残念ながら、この建物は姿を

消すことになったが、なんらかの記憶の継承が図られると聞く。その塔の姿が印象的な横浜雙葉学園にも少しゴシック調のところがある。この建物は基本的には戦後に建てられているが、戦前の創建になるゴシック調やアール・デコ調の部分も残っているようだ。ゴシックスタイルの学校建築のもう一つの傑作が、関東学院中学校の校舎(昭和4年)で、これは市の認定歴史的建造物となっている。正面にそびえる二つの塔がいかにも厳肅な雰囲気を出している。

以上は中高校の建物だが、戦前には高等教育機関に乏しかった横浜にも、高等教育の学校の建物が残されている。横浜高等工業学校の校舎(昭和11年)と慶応大学予科の校舎(昭和9年)である。前者は現在横浜国大付属横浜中学校の校舎として用いられており、国の登録文化財となっている。そして後者は2棟あり、現在慶応大学の日吉校舎と付属高校校舎として用いられている。

### 慶応大学日吉校舎 (第1校舎、第2校舎)

所在地……港北区日吉4-1-1  
構造……RC造3階  
設計……曾根中条建築事務所(網戸武夫)  
施工……(第1校舎)上遠組  
(第2校舎)清水組  
建築年代……(第1校舎)昭和9(1934)年  
(第2校舎)昭和11(1936)年



第1校舎

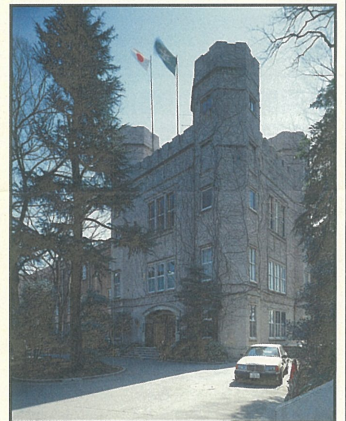
●慶応大学日吉キャンパスは私鉄沿線開発のはしりともいえるもので、東急東横線の建設に伴って誘致された。この建物は、もともとは慶応大学予科の建物だったが、現在は第1校舎が附属高校、第2校舎が大学の校舎として使用されている。8本の大円柱が立つコロネードが特徴的で、同じスタイルの両校舎が中庭を挟んで対峙する姿が印象的である。実は奥にも同様な建物が建ち、中庭の三方がコロネードで囲まれるはずだったが残念ながら実現していない。



第2校舎

### 関東学院中学校

所在地……南区三善台4  
構造……RC造3階  
設計……J. H. モーガン  
施工……不明  
建築年代……昭和4(1929)年



●関東学院は我が国初の歴史をもつミッションスクールで、この校舎は現在の高校にあたる旧制中学の校舎だった。設計を担当したJ. H. モーガンは、山手・園内地区に多くの作品を残す横浜ゆかりのアメリカ人建築家で、この建物から2年後に建てられた山手聖公会もよく似た雰囲気を示している。建物の特徴は玄関部分によく表れており、その城砦風のデザインは中世イギリスのノルマン建築風。関東学院の建築的シンボルともいえる風貌をもち、横浜市認定歴史的建造物となっている。

### 横浜国立大学付属横浜中学校 (旧横浜高等工業)

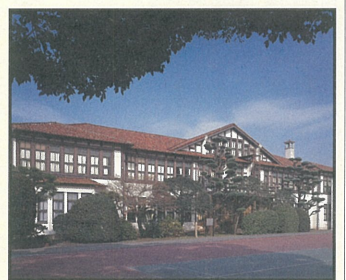
所在地……南区大岡2-31-1  
構造……RC造3階  
設計……文部省営繕  
施工……戸田組  
建築年代……昭和11(1936)年



●横浜高等工業は、横浜国立大学工学部の前身で、国大工学部も昭和53(1978)年まではここに在った。設計は文部省の営繕が担当したと思われるが詳細は不明である。コの字型の平面プランをもつやや厳格な建物だが、幅広いベージュ色のタイルがおだやかな表情を加えている。横浜の戦前の高等教育施設の希少な遺構で、平成13年、国登録文化財となった。

### 横浜共立学園本校舎

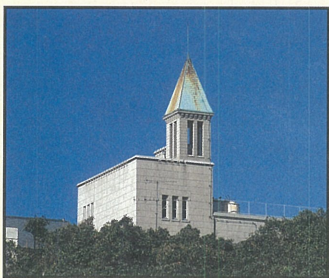
所在地……中区山手町211-1  
構造……木造2階(一部3階)  
設計……W. M. フォーリス  
施工……宮内建築事務所  
建築年代……昭和6(1931)年



●横浜共立学園は、明治4(1871)年山手48番にアメリカ人宣教師により開かれた「亜米利加婦人教授所」が始まりといわれ、翌年「日本婦女英学校」と名を改め、今日に至っている。昭和6年に建築された現校舎は、木構造を外観に表現するハーフ・ティンバー・スタイルであり、中廊下形式の木造校舎は、玄関ホールに幅広い木造階段を設けるなど、ゆとりのあるレイアウトとなっている。この校舎は、昭和63(1988)年に横浜市文化財の指定を受けている。

### 横浜雙葉学園鐘塔

所在地……中区山手町88  
構造……RC造3階  
設計……高木秀寛、富田哲輔  
施工……不明  
建築年代……昭和初期



●横浜雙葉学園は、明治33(1900)年に「横浜紅蘭女学校」として発足した、名門カトリック・ミッションスクールで、その母体はフランスのサン・モル修道会であった。昭和26(1951)年に現名称に変更されている。昭和初期に建設された校舎の大半は空襲で破壊されたが、現在の校舎の東側階段室上部の鐘塔は、痛んだものを学校のシンボルとして旧態にならって修復したものとされている。なお、もうひとつの新館の塔は、この鐘塔の意匠を踏襲した形として建設されている。

### フェリス女学院中高等部1号館

所在地……中区山手町178  
構造……RC造3階  
設計……森山伊望  
施工……宮内建築事務所  
建築年代……昭和4(1929)年



●フェリス女学院は、アメリカ人宣教師のミス・キダーが居留地を開いていた明治3(1870)年創業の英語塾が始まりといわれ、山手の現在地に明治8年に開校している。震災復興として昭和4年に建設された校舎は、外壁に鉄平石を張り、ゴシック風尖塔アーチの窓がある外観となっている。この建物内部にあるカイパー記念講堂は、震災で殉職した校長の名を記念してつくられたものであるが、現在進められている再整備により建物の外観および講堂のステンドグラス等が保全活用される予定である。